

知的障害特別支援学校におけるキャリア教育の取り組みに関する検討 ーキャリア教育の研究実践に取り組んだ教員の意識の変化を通してー

石川 則子*・田淵 健*・稗貫 真理子*・中村 昭彦*・宮崎 眞**

(2013年3月5日受理)

Noriko ISHIKAWA, Ken TABUCHI, Mariko HIENUKI, Akihiko NAKAMURA, Makoto MIYAZAKI

The Effects of Group Discussion of Modifications Regarding the Practices of Career Education
in the School for Special Needs Education (Mental Retardation)

I 目 的

特別支援学校におけるキャリア教育は、2009年学習指導要領の改訂において、高等部学習指導要領総則に位置付けられた。菊地らの調査(2012)によると、キャリア教育の推進の必要性を感じ、何らかの取り組みを始めている特別支援学校は多いが、キャリア教育の組織的理解については模索段階にある学校が大半であることが示されている。また、キャリア教育推進の課題として、具体的な実践イメージ、学校全体としての組織的取り組み、定義と意義の共通的理解が上位の回答として挙げられている。

岩手大学教育学部附属特別支援学校(以下、本校)は、小学部、中学部、高等部が設置されている知的障害特別支援学校である。本校では、2010～2011年の2年間にわたり、「児童生徒が主体的に生きる姿を目指した授業づくりーキャリア教育の視点を生かしてー」を研究主題にして、キャリア教育の実践研究に取り組んだ。2年間の取り組みの結果、本校のキャリア教育の方向性が明らかになった。その取り組みの詳細については、本校の第18回学校公開研究会(2011年10月)において実践報告を行った。また、実践を重ねていく中

で、キャリア教育に対する教員の意識が変化していった。

そこで、本研究では、2年間の本校のキャリア教育への取り組みの経過に伴う教員の意識について取り上げる。また、今回は、取り組みの経過に対する教員の意識の把握だけではなく、教員の意識が次の取り組みにどのように影響したかについてもまとめていく。教員自身がキャリア教育実践の主体であり、中核である(渡辺2012)ことを考えると、キャリア教育の取り組みの経過とキャリア教育に対する教員の意識の双方から検討することは、キャリア教育を推進していく上での課題を明らかにすることにつながるのではないかと考える。

本研究を通して、キャリア教育の取り組みに関する一つの検討資料を提案したいと考える。

II 方 法

本研究では、知的障害特別支援学校において、キャリア教育の実践研究を進める2年間の経過の中で、キャリア教育に対する教員の意識の変化を明らかにする。

2年間に及ぶキャリア教育の研究のおもな取り

* 岩手大学教育学部附属特別支援学校

** 岩手大学教育学部特別支援教育科

組みは、次の4項目である。

- (1) キャリア教育に対する共通理解
- (2) キャリア教育の視点の設定
- (3) キャリア教育全体計画の検討
- (4) 研究授業の実施

これらの取り組みは、全校研究会及び各学部研究会（小学部、中学部、高等部）において進める。

キャリア教育に取り組んだ2年間は、おおよそ次の3つの時期に分けられる。

I 期：キャリア教育導入段階 2010年1～3月

II 期：キャリア教育の研究1年次 2010年4月～2011年3月

III 期：キャリア教育の研究2年次 2011年4月～11月

キャリア教育の研究の取り組みに対する教員の意識の把握については、教員の意識を示すものとして研究会における教員の発言の抽出、聞き取り調査、アンケート調査を実施した。実施時期は次のとおりである。

- (1) I 期：キャリア教育導入段階での教員の意識の把握

2010年1～3月に行われた研究会における教員の発言のうち、キャリア教育に取り組むことについての発言を抽出する。

- (2) II 期：キャリア教育の研究1年次での教員の意識の把握

II 期については、1年次研究途中と1年次終了時点の2回実施する。

a 1年次研究途中

2010年12月に行われた研究会における発言のうち、キャリア教育の研究についての発言を抽出する。

b 1年次終了時点

2011年3月、キャリア教育に取り組んだ教員22名に聞き取り調査を実施する。質問項目は次の3項目、回答形式は自由回答である。

- ①研究テーマであるキャリア教育の視点を生かした授業づくりについてどのようなイメージをもっているか。
- ②キャリア教育の視点を4点設定しているが、そ

の中で一番大事にしたいものは何か。

- ③キャリア教育の研究の進め方についての意見。

- (3) III 期：キャリア教育の研究2年次での教員の意識の把握

2011年11月、キャリア教育に取り組んだ教員に、キャリア教育の研究を振り返って現在感じていることについて、自由記述のアンケート調査を実施する。

以上のキャリア教育の研究の取り組みとその経過に伴う教員の意識の変化から、キャリア教育の取り組みに関する検討を行う。

III 結果と考察

結果と考察については、I～III期の各期ごとにまとめていく。各期ごとに、まず、キャリア教育の研究の取り組みについて内容を示し、次に教員の意識の把握の結果を示す。そして、キャリア教育の研究の取り組みと教員の意識についての考察を述べていく。

1-1 I 期：キャリア教育導入段階の取り組み

キャリア教育導入段階においては、(1) キャリア教育に対する共通理解を中心に、全校または学部ごとの研究会で協議を重ね、2010年度より2年次計画でキャリア教育の研究に取り組むことを確認した。

- (1) キャリア教育に対する共通理解

研究主題を「児童生徒が主体的に生きる姿を目指した授業づくりーキャリア教育の視点を生かしてー」と設定した。これまでの研究では、全体の研究主題を受けて、さらに、各学部ごとに研究のテーマを設定してきた。今回のキャリア教育では、各学部の研究テーマを設けずに、全体の研究主題の下に取り組みを進めることにした。

キャリア教育の研究に取り組む理由として、次の4点を確認した。

- ①学校教育目標の実現

学校目標である「児童生徒の個別の教育的ニーズにこたえ、その成長と発達を支援し、充実した

学校生活を通して、自ら学ぶ意欲をもち、日々の生きる喜びを感じ、将来の社会生活において主体的に生きていく人間の育成を目指す」ことを実現するために、キャリア教育を取り入れることは有効である。

②前次研究との関連

前次研究までに、児童生徒の社会生活力を育むために、児童生徒が主体的に活動する姿を求めて授業づくりに取り組んできており、今後も継続していくことが必要である。

③特別支援教育の動向

新学習指導要領にキャリア教育の推進が位置づけられるなど、児童生徒の勤労観・職業観の育みを目指し、組織的・系統的に取り組みを推進していくことが求められている。

④附属校園としての役割

附属校として、研究にキャリア教育を取り入れることについての提案が大学側よりあった。

また、研究実践の方向性として、次の2点を確認した。

①キャリア教育全体計画の作成及び発達段階・内容表の検討

国立特別支援教育総合研究所（以下、特総研）「知的障害のある児童生徒のキャリア発達段階・内容表」を参考に、本校のキャリア教育全体計画を作成する。

②授業実践

児童生徒が主体的に活動する授業に取り組むとともに、キャリア発達の4領域8能力（以下、キャリア発達の4領域）の発揮を支える支援の検討を行う。

1-2 I期：キャリア教育導入段階の教員の発言のサンプル

キャリア教育に取り組むことについて、教員の発言は次のとおりである。

- ・キャリア教育に関連する言葉に振り回され、授業実践が疎かになるのではないかな。
- ・キャリア発達の4領域「人間関係形成能力」

「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の言葉から、能力そのものだけを育成するように感じる。これまでの本校の研究の成果を踏まえて、別の表現にしてもよいのではないかな。これまでの研究で用いた言葉に置き換えることができるのではないかな。

- ・キャリア教育の具体的な方向性が見えない。
- ・キャリア教育全体計画の作成は必要なのか。作成することだけに追われてしまうのではないかな。どのように授業に生かしていくのか。
- ・新たなことへ取り組むより、これまでの実践に基づいた授業づくりを深めることに継続して取り組みたい。
- ・キャリア教育の示す範囲が広すぎる。焦点を絞って進めてはどうか。
- ・視点を合わせないと学部ごとにバラバラになってしまうのではないかな。

キャリア教育に対して戸惑いを感じている発言が多く見られた。

1-3 I期：キャリア教育導入段階の取り組みと教員の意識からみる検討

キャリア教育は、初めて取り組む研究課題である。先行研究も少なく、これまでの研究にはなかった視点であったために、具体的なイメージがもちにくかったと考えられる。また、キャリア教育に関連する用語が提示されているが、なじみがない言葉がほとんどで、それらの言葉をどのように解釈したらよいのか、具体的に授業にどのように結び付いていくのか、まだ明確ではない段階であったと考えられる。

研究の進め方においても、これまでは、各学部ごとに研究テーマを設けて研究をまとめてきたのだが、学部ごとの研究テーマを設けないことにしたので、どのように研究が進んでいくのか、見通しがもちづらかったのではないかなと考える。

2-1 II期：キャリア教育の研究1年次の取り組み

1年次は、以下のことについて取り組んだ。

(1) キャリア教育に対する共通理解

① 先行研究資料の提示

キャリア教育について共通理解を図るために、2010年3月に以下の資料を提示した。

- ・ 先行研究実践校の紹介
- ・ 特別支援学校（知的）キャリア教育推進ガイドブック（岩手県総合教育センター特別支援教育室2008）

② 研修講演会の実施

特総研菊地一文氏によるキャリア教育についての講演会を、2010年6月に実施した。内容は、キャリア教育の意義、評価、キャリア発達、児童生徒の「願い」、実践事例等である。また、3月に提示した知的障害のある児童生徒の「キャリア発達段階・内容表（試案）」（特総研）の改訂版である以下の新たな資料の提供を受けた。

- ・ 知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」（以下、「キャリアプランニング・マトリックス」）

③ 研究の重点

研究の重点については、「授業を通してどう教えるか」とし、授業における支援の在り方を中心に進めることを確認した。

(2) キャリア教育の視点の設定

研究主題にも含まれているキャリア教育の視点について協議を重ね、2010年12月に、本校のキャリア教育の視点として4点設定した。各視点とその内容を以下に示す。

視点1) キャリア発達の4領域の育み

キャリア教育全体計画を作成、これを基に単元・題材を設定する。

視点2) 教育活動全体を通じた組織的な取り組み

キャリア教育を教育活動全体で行っていくことを確認するとともに、領域・教科を合わせた指導に関するつながりを確認する。

視点3) 一貫性・系統性のある支援

生活単元学習及び作業学習について見直すとともに、各学部におけるつながりを確認する。

視点4) 子どもの願いを大切にしたい子ども主体の授業づくり

児童生徒の願いを大切にするとともに、キャリア教育全体計画と関連させながら授業を行う。

(3) キャリア教育全体計画の検討

「キャリアプランニング・マトリックス」を参考にして、2010年8月～2011年2月にかけて協議を重ね、資料1 キャリア教育全体計画を作成した。尚、「キャリアプランニング・マトリックス」は、文献1) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」49～50頁に掲載されている。

「キャリアプランニング・マトリックス」において、「各学部段階で育てたい力」と表記されている部分を「各学部のキャリア発達に関する願う姿」と置き換えることにした。各学部ごとに、これまでの授業実践を振り返りながら、一項目ずつ具体的な文章に表していった。そして、項目ごとに本校独自のキーワードを設定した。

次に、各学部が具体化した内容を横並びの一覧にまとめ、項目ごとに学部間のつながりのある表記となっているかについて、教員全体で協議を行った。

(4) 研究授業の実施

全校授業研究会は、2010年11～12月に3回実施、小学部生活単元学習、中学部、高等部作業学習について協議を行った。

学習指導案中の単元・題材の目標、個人の目標に、キャリア発達の4領域を対応させることとした。これにより、授業とキャリア教育に関連をもたせるようにした。

協議については、視点3) 一貫性・系統性のある支援、視点4) 子どもの願いを大切にしたい子ども主体の授業づくりを柱として授業研究会を進めた。授業における支援が協議の中心となった。

2-2a II期：キャリア教育の研究1年次での研究会における教員の発言のサンプル

2010年12月に実施した研究会における教員の発言のうち、キャリア教育の研究についての発言は次のとおりである。

- ・授業には、キャリア発達の4領域が重なり合っており、4領域を分けて考える必要があるのか、疑問を感じる。
- ・研究授業の協議の中で、キャリア発達の4領域について話題にならなかった。キャリア教育の授業になっているのか不安を感じる。
- ・視点2) 組織的な取り組み、視点3) 一貫性・系統性への取り組みが弱いと感じる。
- ・教務部で教育課程の見直しを行っているとのことだが、分掌ごとの取り組みとなっている。組織的な取り組みが必要である。
- ・系統性、一貫性が何を示すのかわからない。
- ・卒業後にどのようなことが大切なのかを加えていくと、将来に向けて今何が足りないのか、本当に必要なかがわかってくるのではないか。

キャリア教育の研究の取り組みについて、課題点を挙げる発言が見られた。

2-2b II期：キャリア教育の研究1年次終了時点での教員への聞き取り調査の結果

2011年3月に聞き取り調査を実施した結果は次のとおりである。自由回答としたため、1つの回答がいくつかの質問に関連していたり、同じ言葉を使った回答であっても、回答者によって、対応する質問項目が異なったりしていた。

教員Aの回答

- ①キャリア教育のイメージは、小学部、中学部、高等部、各学部の中味がつながっていくこと。今は、学部ごとに途切れているように感じる。

- ②キャリア教育の視点は、どれを大事にしたらよいのかわからない。

- ③研究がどこに向かっているのかわからない。

教員Bの回答

- ①子どもの今ある姿を見て、何ができるのか、主体的にできるのか、それを授業にどう取り入れていくのか。
- ②組織的な取り組み、一貫性、系統性。意見交換しながら、まとめていけたらよいのではないか。
- ③一貫性は課題であるが、長い間、学部ごとに独自で研究実践に取り組んできたため、とても難しいことだと感じる。また、学習内容をプログラム化している学校もあるが、本校ではそれなりのやり方でよいのではないか。

教員Cの回答

- ①今までやってきたことを理論づけしていけばよいのではないか。無意識にやっていることを意識することで研究として成り立つのではないか。小・中・高がつながっていくことが大事で、理論づけていけばつながっていく。
- ②視点3) が大事である。バラバラだと今までと同じである。
- ③特になし

教員Dの回答

- ①主体性をどのように授業で出していくのか。
- ②視点4) を大事にしたい。つながりを重視していくことも大事である。
- ③キャリア教育をプログラム表に沿って取り組んだ場合、どんなに重い実態の生徒にも当てはめてやらなければならないのか、本当に全員が身に付けることができるのか。

教員Eの回答

- ①就労を見据えているので、この学校でやっていること自体がキャリア教育だと思う。
- ②どれも必要だが、視点3) の一貫性、系統性。

③特になし

教員 F の回答

①キャリア教育は、すぐに結果として見えない。授業を見て、ここがキャリア教育だということがわかりにくい。学部ごとに途切れるのではなく、小・中・高の流れがわかるようだとよい。

②視点3)。2年間では難しいが、系統性は大事だと思う。

③キャリア教育は2年間で終わらせない方がよい。

教員 G の回答

①学部ごとにやっていることが系統的になること。

②視点3)であるが、支援という言葉が引かかる。支援の意味が広すぎるので、この言葉を外すと良い。全体を通した時の各学部の位置付けがあると良い。

③キャリア教育を具体化した教育課程にしてはどうか。

教員 H の回答

①キャリア教育は高等部から始めることなく、小・中・高が連携して積み上げていくもの。今までの授業でよいので、どうつなげるかだけをしっかりとやるとよい。

②視点4)は当然のこと。視点2)と視点3)が大事。

③何を目指しているのかわからない。子ども達のためにわかりやすい研究にしたい。方向性がわかれば組織的に取り組めるのではないか。キャリア発達の4領域の言葉に縛られなくてもよいのではないか。

教員 I の回答

①今までやってきたことをキャリア発達という視点でとらえることができると思う。キャリア教育から見て、足りないところなどを見直し、考え直していくものだと思った。

②キャリア教育全体計画の中のキャリア発達に関する願う姿は、全学部で共通理解したことなので、ベースにしていけたらよい。

③ワークキャリアよりライフキャリアを目指し、系統性をわかるようにしたい。能力という言葉は積極的に使わない方がよい。

教員 J の回答

①キャリア教育はこれまでやってきた「生きる力」につながっていくこと。

②一貫性・系統性が重要。

③キャリア教育は必要だが、研究としては苦しいのではないか。作業学習の中・高の一貫性を考えたい。

教員 K の回答

①キャリア教育全体計画はこういうことを子どもたちにしたいというものをとおろしていると思う。キャリア教育の目標となるのではないか。

②視点4)。

③何かができるというより、一人で活動できるように支援していくこと。できるようになったり、子ども自身が喜びになったりすることをねらっていきたい。

教員 L の回答

①卒業後を考えて、その子に何が必要かがベースになる。社会に出た時に必要なことを学ぶ。

②視点1)。小・中・高のつながり。

③授業の中でキャリア教育にかかわるようにする。

教員 M の回答

①日々の授業に重点をおきたい。日々の授業づくりのポイントがキャリア教育ではないか。小・中・高がそれぞれ何を大切にするとよいのか。

②授業は視点4)だが、将来を考えると視点3)である。小・中・高のつながりが大事だが、今の段階では難しい。

③ただ働くだけではなく、周辺部分もトータルに考えて豊かに生活できることを考えたい。学校全体で深めていきたい。キャリア教育の研修を受けたことはあるが、キャリア発達の4領域の言葉と実際のことを結び

付けられなかった。今の段階では一貫性は難しいので、次の研究で学部縦割りをやってはどうか。

教員 N の回答

- ①これまで積み重ねてきたことをまとめていけばよいと思っていた。キャリア教育っぽくしなければならないのか。学部としてのキャリア教育はまとめてきたと思う。
- ②視点4)。視点1)と視点3)はこの一年でやってきている。視点2)はよくわからない。
- ③やっていく中で一貫性は難しいのではないかな。

教員 O の回答

- ①小・中・高の流れが見えるイメージがある。一貫性の考えの下での授業づくり。学部ごとに独自のスタイルがあって1本の線になっていない。
- ②視点4)、子どもからスタートした授業づくりをしたい。しかし、子どもの願いは何か、難しい。キャリア教育全体計画は自分達の言葉からスタートした。やってよかった。
- ③一貫性がないとキャリア教育とは言えないのではないかな。キャリア教育を研究に限らず、学部縦割りのグループディスカッションがあってもよいのではないかな。来年度につながっていくのではないかな。キャリアの評価ができていない。授業の評価とするのか。子どもの伸びで評価するのか。

教員 P の回答

- ①キャリア教育の表を踏襲して、授業づくりをしていくと思っていた。キャリア教育について基本的なものがあってもよいのではないかな。
- ②視点3)を大事にしたい。視点2)組織的の意味がわからない。
- ③系統性を考えると、比較しやすい生活単元学習を取り上げるなど、焦点を絞ったらどうか。

教員 Q の回答

- ①キャリア教育の言葉を聞くと技能面のイメージがある。すっとんと落ちてこない。テーマが大きすぎて、イメージがもちづらい。
- ②視点3)に絞ってやったらよいのではないかなと思っていた。しかし、難しいのではないかな。系統性と言っているが、まだ学部それぞれで、難しさを感じる。
- ③キャリア教育全体計画を成果とするのがよいのではないかな。

教員 R の回答

- ①系統性。
- ②視点3)。
- ③キャリア教育全体計画を吟味したらよいのではないかな。

教員 S の回答

- ①卒業後を見据えて学校で何をやっていけばよいのか明らかにできればいい。卒業後の行き先で役に立つことを子どもたちが身に付けられればいい。
- ②視点2)の学校全体ははずせない。視点4)は学部ごとに深めていく時のメインになるのではないかな。「こういうことを大切にしている」ということを共通理解して進めていくことが必要だ。全体で共通理解するということは、キャリア教育全体計画が基本となるのではないかな。
- ③先行研究の資料を使いながらやってきたが、自分の学校に当てはめた時に、対応できるところとできないところがあった。そのまま取り入れてもひっかかる場所が出てくる。卒業後の話を聞きながら研究を進めていかないと実際に卒業後の力が付いたかがわからない。進路先の話を取り入れながら取り組むとよいのではないかな。例えば、生活単元学習で横並びにやれば、一貫性、系統性がわかりやすいのではないかな。

教員 T の回答

- ①子どもが将来どうなっていきたいかということを実現していく、将来のためにどんな力

をつけたいかをやる。今までやってきたことである。しかし、キャリア教育の授業とキャリア教育ではない授業の違いは難しい。学校自体の一貫性、系統性をやってこなかったのも、それを視点にしたことで難しいと感じる。どんな時にどんな指導をするかという一貫性は学部ごとにやってきているが、系統性はお互いにほかの学部をみていない人が多いので難しい。

- ②視点4)の子どもが主体的にできる授業をしていったらよいのではないか。がんばって作ってきたのはキャリア教育全体計画で、これには全員の考えが入っている。
- ③「こういうことを大切にしている」ということを全員がわかってやれるとよい。

教員Uの回答

- ①将来像を見据えて、小・中・高と長期的な流れの中でどう育てていくかである。卒業する時に、その子にどういうことを願っていくかということを考えたい。小・中・高がそれぞれでやっていることのつながり、積み重ねを見据えていくかである。3～4年前の会議出席時に、キャリア教育は、特別支援教育では今までやってきたことから、キャリア教育と気負わないで、今までやってきたことをどう意味づけしておさえしていくかだという話があった。小・中・高が揃っているのも、つながって最終的にどうなるか、長いスパンで見えていけることが特徴である。つなげていかなければならないと思う。
- ②視点3)の一貫性、系統性が大きいと思う。イメージとしてはキャリア教育全体計画。
- ③卒業後の生活をイメージして準備していくとよいのではないか。

教員Vの回答

- ①スキルを理解した上で必要なことを身に付けて社会に送り出すこと。4つの領域はバランスが取れているのではないか。
- ②視点4)、次が視点3)。しかし、つながり

がしっかりしていない。小・中・高それぞれの目指す姿では、それぞれになってしまふ。働くまでの積み重ねを大事にする。

- ③卒業後の人生を含めて想定した計画だと本物になるのではないか。

聞き取り調査の結果を見ると、22名中Kを除く21名が、いずれかの質問項目で「系統性（視点3）の回答含む」「つながり」という言葉を使用している。一方で、6名（B、F、M、N、Q、T）が学部間がつながりをもつことは難しいと回答している。

また、いずれかの質問項目で、「キャリア教育全体計画」を回答に挙げている教員が8名（I、K、O、Q、R、S、T、U）である。

卒業後に言及している回答は7名（E、L、M、S、T、U、V）、ライフキャリアに触れている回答が2名（I、M）である。

研究の取り組み方として、学部の枠を超えた縦割りでの協議が必要であるという回答は2名（M、O）である。

キャリア教育の視点について視点1)が大事であるという回答が2名、視点2)が3名、視点3)が14名、視点4)が9名、わからないが1名である。

視点1)で使われているキャリア発達の4領域について、肯定的な回答は1名（V）、必要性に疑問を感じている回答が4名（H、I、M、Q）である。視点2)で使われている組織的という言葉について、Pが「組織的の意味がわからない」と答えている。視点3)で使われている一貫性・系統性については、一貫性・系統性を一つのまとまりのある言葉として使っている教員もいれば、一貫性、系統性のどちらか一つだけの言葉を使っている場合もある。また、Tのように、一貫性と系統性の言葉の意味をそれぞれ分けて考えている教員がいる。Gは視点3)の支援という言葉が必要がないと考えている。

2-3 II期：キャリア教育の研究1年次の取り組みと教員の意識からみる検討

1年次12月研究会での発言、1年次終了時点での聞き取り調査結果より、1年次の研究実践についての教員の意識を次のように考える。

聞き取り調査において、21名の教員が一貫性、系統性、つながりという言葉を使用している。この言葉を使用しなかったKであるが、回答の中でキャリア教育全体計画について言及している。このキャリア教育全体計画は、検討の過程で、学部間のつながりについても協議してきており、Kも学部間のつながりについて意識していたととらえられる。

このことから、全教員がキャリア教育においては、学部間の一貫性、系統性、つながりが重要だと考えていることがうかがわれる。つまり、教員全員が、キャリア教育に一致したイメージをもつことができたと言える。

キャリア教育導入段階では、キャリア教育全体計画の作成に疑問をもつ発言があったが、1年次終了時点では、キャリア教育全体計画を肯定する回答が見られた。キャリア教育の視点の中でも視点3)が大事だとする回答が最も多かった。

このことから、1年次の取り組みの大きな成果は、キャリア教育全体計画を作成したことにより、教員がキャリア教育について一致したイメージをもつことができたことである。授業実践を基に文章化する手続きを踏むことにより、キャリア教育が自分達のものであると感じられるようになったと考えられる。そして、学部間のつながりがある内容となるように全教員で協議したことで、キャリア教育において重要なことを一貫性、系統性、つながりであると感じ、回答したと考えられる。

一方で、視点1)として取り上げ、キャリア教育全体計画に明記しているキャリア発達の4領域であるが、授業実践に基づいた言葉に置き換わっていないため、必要性を感じないという回答につながったと考えられる。

視点2)教育活動全体を通じた組織的な取り組みについてであるが、教育活動全体で行っていく

こと、領域・教科を合わせた指導に関するつながりを確認することとしている。研究会の発言、聞き取り調査の結果からみると、組織的という言葉については、学校運営の組織体制ととらえられていることがうかがわれる。これは、組織的という言葉に、学校運営の組織体制と教育活動の内容を組織的に編成するという2つの意味が混在する結果となった。教育活動の内容を組織的に編成することについては、つながり、系統性という言葉が使われている場合が多い。2つの意味が混在するためにわからないという回答があったと考えられる。

視点3)については、一貫性・系統性のある支援としているが、一貫性・系統性が示しているものを支援という言葉に限らずに回答しており、一貫性、系統性という言葉も教員によっては使い方が異なっている。一貫性、系統性という言葉はキャリア教育においては頻繁に使われる言葉ではあるが、言葉の定義が明確ではなかったと考えられる。

視点4)についてであるが、視点4)が大事であるという回答も多いことから、教員はキャリア教育を授業で実現していきたいと考えているということがうかがわれる。しかし、キャリア教育導入前と導入後の授業への取り組みの変化に手応えがなく、キャリア教育を取り入れた授業をやっているという実感がもてないでいることが考えられる。

学部間のつながりに困難さを感じている回答があった。これは、キャリア教育の研究に取り組む前の研究スタイルに大きく関わっている。以前の研究の進め方は、各学部ごとに研究テーマを設定し、学部ごとに授業づくりを深めてきた。しかし、今回は、これまで取り組んでこなかった学部間のつながりに取り組むことになり、困難さを感じたのではないかと考えられる。その中でも、学部の枠を超えた縦割りの取り組みを行ったらよいのではないかと提案もみられている。

また、キャリア教育について、卒業後に触れている回答、ライフキャリアを意識した回答があり、

教員は、児童生徒の将来につながることも考えていることがわかる。

以上のことから、1年次の取り組みを通して、教員は、キャリア教育において大切なことを、一貫性・系統性、つながりであると考え、授業づくりを通してキャリア教育を実現していきたいと考えるようになったととらえることができる。課題としては、言葉の意味が曖昧で教員によって使い方が異なること、学部間がつながっていくことに難しさを感じていることである。

3-1a Ⅲ期：キャリア教育の研究2年次の取り組み

2年次の取り組みに当たっては、1年次終了時点での教員の意識、意見に基づき、学部間の一貫性・系統性、つながりを打ち出すこと、使用する言葉を整理し、教員が同じ認識をもって言葉をとらえるようにするなどの見直しを図ることを確認してから進めた。

(1) キャリア教育に対する共通理解

①進路担当からの現状報告

2011年4月、進路担当から卒業生の事例報告を受け、次のことを共通理解した。

○就労先で定着して働ける要因

- ・働いて収入を得ているという意識があり、それが励みにつながっていること。
- ・得意なことを生かした仕事を担当し、役割意識、責任感があること。
- ・基本的な挨拶、自分の意思を伝えることができること。

○就労先での定着が難しい要因

- ・学校生活との違いを認識できず、仕事に対する意識が弱いこと。
- ・適切な人とかかわり方が育っていないこと。

自分達の実践がどのように卒業後の生活に結び付いているかを共通認識し、キャリア教育の視点をもつことが必要であることを確認した。

②卒業後の願う姿の設定

2011年5月に、キャリア教育は卒業後につなが

るという教員の考えを取り入れ、卒業後の願う姿を設定し、本校の教育活動の目指すものを明らかにした。卒業後の願う姿については、ライフキャリアを踏まえて、「やりがいを感じ、自分の力を発揮して働き、楽しみをもって生活をする」と設定した。この卒業後の願う姿は、小学部の願う姿、中学部の願う姿、高等部の願う姿につながるものとしてとらえることにした。

③研究の重点

2011年4月、研究の重点を「各学部の授業がどのようにつながっているか」に変更した。また、取り上げる授業については、1年次に引き続き、各学部の学習活動の中心となっている生活単元学習（小学部）、作業学習（中学部、高等部）とした。

⑤研究推進の工夫

教員の意見を取り入れ、2011年4月、新たな試みである学部縦割りのグループ協議を行った。グループの構成人数は4～5名とし、各学部から必ず1名は含まれるようにした。事前に他学部への質問アンケートに記入してもらい、それを基に30分を目安に協議を行うようにした。他学部への質問内容は、キャリア教育にかかわらない内容でよいこととした。

(2) キャリア教育の視点の設定

キャリア教育の視点について、2011年5～6月に見直し、次の3点に整理した。

視点1) 小・中・高のつながりのある取り組み

視点2) キャリア発達に関する願う姿の実現

視点3) 児童生徒の主体的な活動につながる授業づくり

1年次に使用していた組織的、一貫性・系統性の言葉については、教員によってとらえ方が様々であったため、使用しないこととした。その代わり、つながりという言葉を使用することにした。

キャリア発達の4領域が意味する「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」について、疑問に感じている教員がいるため、使用する言葉をキャリア教育全体計画で使用している本校独自のキーワードに置き換えることにした。

また、キャリア教育を進めていく上で、大切だとされている児童生徒の願いについて、キャリア教育の視点に挙げてはいたのだが、1年次では、具体的な取り組みをしてこなかった。そこで、2年次では、どのような授業を目指すのかということを確認にした。これは、授業に焦点化してキャリア教育の取り組みを進めることも意味している。

これらの言葉を整理した上で、教員がキャリア教育において、最も重要だと考えている学部間のつながりを視点1)に置くことにした。

(3) キャリア教育全体計画の検討

キャリア教育全体計画の検討を2011年5～8月に行った。

名称について、キャリア教育全体計画から、「キャリア発達に関する願う姿」に変更することとした。1年次に、キャリア教育全体計画を検討する過程で重視してきたことは、各学部の願う姿を具体化することであり、その結果、内容が願う姿を中心にまとめたものとなった。そこで、重視してきたことを最も表す名称にした。これは、視点2)に対応することにもなった。また、各学部の願う姿に加えて、卒業後の願う姿も位置付けた。

キャリア教育全体計画では、キャリア発達の4領域「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の用語を使用していたが、「キャリア発達に関する願う姿」では、キャリア教育全体計画の本校独自のキーワードを踏まえて、用語に代わるキーワードを新たに設定した。研究及び授業においては、このキーワードを使用することにした。

「キャリアプランニング・マトリックス」を基に、自分達の実践を表す言葉に置き換えたキャリア教育全体計画の作成を経て、「キャリア発達に関する願う姿」を作成した(資料2)。

次に、小学部段階での置き換えの一例を示す。

○「キャリアプランニング・マトリックス」

キャリア発達の4領域：情報活用能力

観点：はたらくよろこび

育てたい力：自分が果たす役割の理解と実行

○「キャリア発達に関する願う姿」

(区分)：働くこと、生活すること

キーワード：役割

願う姿：係の仕事や分担の仕事などの自分の役割を知り、実行する

(4) 研究授業の実施

2011年7月に、小学部は生活単元学習の学部授業研究会、中学部、高等部は作業学習の合同授業研究会を行った。各学部の授業研究会には、他学部の教員も参加可能とした。

研究会では、「どのようなキャリア発達に関する願いをもって授業を行ったか」「授業における支援が次の段階につながるものか」ということを中心に協議を行った。その結果、つながりということを意識した発言が出るようになった。

3-1b Ⅲ期：キャリア教育の研究2年次で得たキャリア教育の研究の結論

2011年10月に実施した、小学部生活単元学習、中学部、高等部作業学習の単元・題材における目標と「キャリア発達に関する願う姿」のキーワードを対応させた結果が次のとおりである。

小学部生活単元学習「つくしパーティーをしよう」

○つくしパーティーを睦寿会の方と一緒に楽しむことを楽しみにしながら、活動することができる。

(対応するキーワード：【生きがい・やりがい】)

○目標を意識しながら、自分の役割に最後まで取り組むことができる。(対応するキーワード：【目標設定】【自己評価】【役割】)

中学部作業学習「鉢カバーを40個作ろう～あにわ祭にむけて～」

○鉢カバー作りにおいて、自分の役割を理解し、主体的に取り組むことができる。(対応するキーワード：【目標設定】【自己評価】【役割】)

○あにわ祭に向けて、みんなで協力して40個の鉢カバーを作り上げる。(対応するキーワード：【生きがい・やりがい】【集団参加】)

高等部作業学習「フルーツキャップの組み立てⅡ」

○作業の流れを理解し、主体的に取り組む。(対応するキーワード：【生きがい・やりがい】【集

団参加】)

○納品に向けて製品を正確に作るができる。

(対応するキーワード:【目標設定】【自己評価】
【役割】)

○場に応じて挨拶や報告、依頼することができる。

(対応するキーワード:【場に応じた言動】【意思表示】)

以上のことから、生活単元学習、作業学習において、小学部、中学部、高等部が共通して取り上げた「キャリア発達に関する願う姿」のキーワードは、【目標設定】【自己評価】【役割】【生きがい・やりがい】であった。

この4つの願う姿と授業、児童生徒一人一人のキャリアとの関連について検討した。キャリアは、社会の中の役割の連続であり、働くということに対する一人一人の体験や価値付けの過程である。このことを踏まえ、次のように考えた。児童生徒は、授業の中で【役割】をもち、活動している。その【役割】について、【目標設定】をして【自己評価】することは、自分なりの価値付けをすることになる。自分なりの価値付けにより得られる達成感や自己肯定感は【生きがい・やりがい】につながっていく。授業の中で自分の【役割】を果たすことを積み重ねていくことによって、自分な

りのキャリアを築いていくことにつながるのではないかと考える(図1)。

このように、生活単元学習、作業学習が、キャリア教育に重要な役割を果たしていることがわかった。そして、小学部、中学部、高等部が、児童生徒のキャリア発達のために【役割】【目標設定】【自己評価】【生きがい・やりがい】を大切にしているというつながりがわかった。

3-2 Ⅲ期：キャリア教育の研究2年次終了時点での職員へのアンケート調査の結果

教員にキャリア教育の研究を振り返っての感想について、2011年11月に自由記述のアンケートを実施し、20名の回答を得た。

- ・日々の授業の大切さ、授業の積み重ねの大切さを感じた。また、他学部についてもっと知る必要があると思った。
- ・キャリア教育の視点を学校全体として整理し、捉えることができてよかった。今までだと、それ自体がキャリア教育だったとしても、ただ漠然としたものだったので、流れが分かり、長い将来を見据えて指導に当たる指針となった。
- ・自分達が今まで取り組んできたことが、決してキャリア教育から離れたところではなかったと再確認できてよかった。
- ・小学部の実践が低学年・中学年・高学年のつながりを見直す機会となったと思う。また、他学部の取り組みについても、共に考えていく機会となった。【生きがい・やりがい】でのつながりだったが、単元の取り組み方、取り組む内容、その中での支援のつながりについては、研究のまとめで再確認していけたらと思う。
- ・キャリア教育だけではなく、キャリア教育を生かした授業づくりの研究だったと思う。子ども達の今だけではなく、将来どうなっていきたいかを考えて授業を行ったが、以前から行っていたことなので、今までの

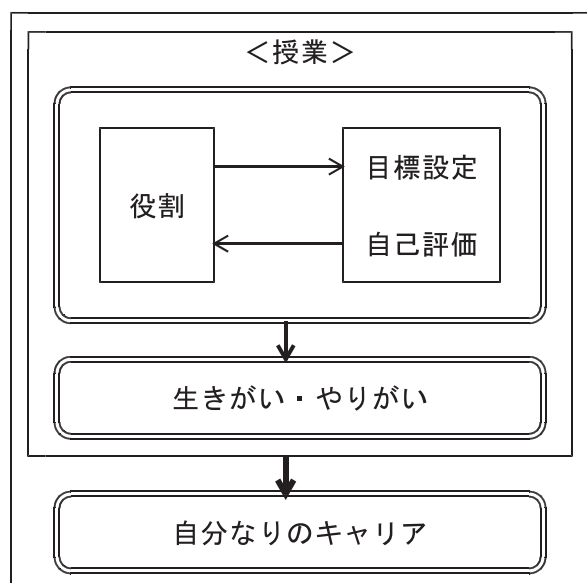


図1 キャリア発達に関する願う姿と生活単元学習、作業学習

教育、授業づくりと何が違うのかを考えた。

- ・ 目指す児童の姿を意識しながら授業づくりに取り組めるようになったと思う。児童の思いを大切に、主体的に活動していくためにどうしたらよいのか、授業づくりに向かうわたし達の姿勢がキャリア教育につながっていたと思う。
- ・ 学校全体として、今やっていることが前提となって次へ続き卒業後につながるということはわかってきたように思う。しかし、具体的な内容のつながりが次への課題になるように思う。
- ・ 今まで取り組んできたことを振り返り、活動の意味を考えたり、なぜ行っているかを再検討できたことがよかった。作業学習だけではなく、教育活動全般でそのようなことができればよい。
- ・ 今までキャリア教育と聞くと、とても難しく感じていたが、今回関わったり、話を聞いたりして、以前より身近に感じた。授業を積み重ねていく度に、生徒が変容していく様子を見ることができて本当に嬉しかった。将来、働くために、小・中・高でのつながりや積み重ねの大切さを改めて実感した。今、行っている支援も生徒達の将来へつながるものと改めて思った。
- ・ 自分達が行っていることを検証してみればよいという安易な考えでいたが、どのように検証して積み上げていくか実際の場面では戸惑うことがあった。今回の研究を通して、小学部から高等部までのかかわりについて考える大切さを改めて感じた。次の研究にキャリアの言葉を取り上げるかは別にしても、今回の課題である学部間のつながりを継続していく必要がある。
- ・ 何かを新たに始めるのではなく、これまでの実践を見直すきっかけとなった。職員間、学部間の共通理解を図ることができた。
- ・ キャリア教育の視点から、日常行ってきた授業を見直すことができてよかった。日常

行っている授業を進めていることが、キャリア教育を実践することにもなっていたことがわかった。

- ・ 学校の課題をキャリア教育の視点を通して見えてきたように思う。
- ・ キャリア教育というものの自体は新しい考え方かもしれないが、今までの実践がキャリア教育の視点から行われていたということを確認できる機会となった。
- ・ 小・中・高のつながりがどの程度進展したのか、キャリア教育の考え方がむしろわからなくなった。
- ・ 研究を通して、作業学習の在り方、現場実習とのつながりなどを見通し、共通理解する機会になった。
- ・ 取り組みやすい研究だった。キャリアという題名があると全体で取り組みやすい。
- ・ 本校での教育活動をキャリア教育の視点からとらえ直し、一つ一つの活動や支援の意味づけをしっかりとできてよかった。
- ・ 学部間のつながりを具体化していくことが課題であり、どの程度つながりが進んだかについては検証が必要である。
- ・ キャリア教育は、幼児期－学校－成人期をつなぐためのツールとして活用するべき。特別支援学校の教育を系統立てるためには有効。

キャリア教育がわからなくなったと回答している者が1名いるが、多くの回答がキャリア教育に取り組んだことに対して肯定的である。肯定的な回答の内容には、学部間のつながり、これまでの実践の再確認、日々の授業の大切さ、将来を見据えることについて言及している。キャリア教育を身近に感じたという回答もあった。

また、今後のキャリア教育の取り組みに対しての課題を指摘する回答も見られた。

3-3 Ⅲ期：キャリア教育の研究2年次の取り組みと教員の意識からみる検討

キャリア教育は教育活動全体で取り組んでいくものであり、キャリア教育を研究として取り上げる場合、その取り組むべき内容は多岐にわたる。キャリア教育の研究を進めるに当たり、一人一人の考えが異なる場合、協議の方向性も多岐にわたってしまうことが考えられる。研究で取り組む場合、協議の方向を明確にしていくことが大切ではないかと考える。

2年次の取り組みでは、全教員が大切だと考えている学部間のつながりから検討を重ねた。これにより、教員がキャリア教育の方向性に納得しながら取り組むことができた。確かに、キャリア教育がわからなくなったという回答はあったが、その理由は、学部間のつながりがもつことができたかを疑問に思っているためである。また、研究の課題を指摘する回答もあったが、その課題の内容は学部間のつながりに関するものであった。

系統性などのキャリア教育においてよく使われる言葉であっても、教員間でとらえ方の異なる言葉を整理し、わかりやすい言葉を使用した。キャリア発達の4領域の用語についても、自分達にとって理解できる言葉に置き換えていった。これらも、協議の場において、一つの方向性を示すことに役立ったと考える。そして、協議する内容のわかりやすさにもつながったと考える。

日々の授業がキャリア教育においてどういう意味をもつのか、これを考えていくことは、キャリア教育を自分自身の問題として考えることになった。その結果、教員はこれまでの実践に自信をもつことができたり、キャリア教育の視点から授業をみることで、これからの授業について、積み重ねを大切にしていきたいなどの新たな指針を得たりしている様子がみられた。キャリア教育に取り組んでいるという実感がもてたことが、肯定的な回答につながったと考える。

Ⅳ まとめ

キャリア教育導入当初は、キャリア教育が取り組むべき内容があまりにも幅広いために、教員一人一人がキャリア教育への見通しをもちづらい状況にあったが、2年目終了時点では、キャリア教育の取り組みに対して肯定的な回答が多く見られた。

今回のキャリア教育の研究の取り組みでは、「①教員がキャリア教育について一致したイメージをもつこと」「②具体的でわかりやすい言葉で説明し、キャリア教育の方向性について共通理解を図ること」「③キャリア教育に取り組んでいる実感がもてるように授業実践に基づいて検討を重ねること」が大切であったと考える。また、キャリア教育において大切なことは何かということ、一人一人の教員自身が考える過程でもあった。

今回、本校のキャリア教育の研究では、生活単元学習、作業学習の授業に絞って行うこととなったが、本来、キャリア教育は学校の教育活動全般を通して行っていくものである。引き続き、児童生徒のキャリア発達につながる授業について研究を進めるほかに、教員が共通理解をしながら、学校全体でキャリア教育を推進していく具体的な方策について検討することが、本校の今後の課題であると考ええる。

本研究では、教員の意識を把握するために、各時期の研究の状況に応じて、研究会での発言の抽出、個別の聞き取り調査（自由回答）、自由記述のアンケート調査の複数の方法を実施した。キャリア教育実践の主体である教員の意識の把握は、キャリア教育に取り組む上での課題を明らかにすることにつながり、大切なことである。今回は、キャリア教育という新たなことに取り組んだために、実施方法も模索する結果となった。今後は、教員の意識を把握する方法について、よりよい方法を検討していくことも必要ではないかと考える。このことがキャリア教育の推進に役立つのではないかと考える。

謝 辞

本校がキャリア教育の研究を進めるにあたり、北海道立稲穂高等支援学校校長木村宣孝氏より研究推進への多くの助言と励ましをいただきました。また、キャリア教育においては、学校としての歩み、教員の歩みも大事であるということを教えていただきました。心より深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編
2011 特別支援教育充実のためのキャリア教育
ガイドブック ジアース教育新社
- 2) 岩手大学教育学部附属特別支援学校 2011
研究紀要21 岩手大学教育学部附属特別支援学
校
- 3) 菊地一文・松為信雄・杉中拓央 2012 特別
支援学校におけるキャリア教育の現状と課題に
関する実態調査(1)(2)ーキャリア教育の
推進状況及び用語の認知度を中心にー 日本特
殊教育学会第50回大会発表論文集
- 4) 渡辺三枝子 2012 キャリア教育の理念と今
後の課題 特別支援教育 No.46 東洋館出版社

資料 1

キャリア教育全体計画

[学校教育目標] 児童生徒の個別的教育的ニーズにこたえ、その成長と発達を支援し、充実した学校生活を通して、自ら学ぶ意欲をもち、日々の生きる喜びを感じ、将来の社会生活において主体的に生きていく人間の育成を目指す。		
[目指す子ども像] 1 豊かな心と丈夫な体を作る人 2 生活に必要な技能を高め、意欲をもって活動する人 3 みんなと仲良く協力し合い、生活の中に楽しみをもてる人 4 自ら進んで仕事をし、働くことに生きがいをもてる人		
[各学部目標]		
小学部	中学部	高等部
1 元気に生き生きと活動する子ども 2 身近なことに関心をもち、意欲的に生活する子ども 3 みんなと仲良く、協力し合って活動する子ども 4 手伝いや係活動などをすすんでする子ども	1 丈夫で動きの良い体をつくり、すこやかな心をもつ生徒 2 生活に必要な基礎的な事柄を身に付け、主体的に活動する生徒 3 みんなと協力して楽しく意欲的に活動する生徒 4 自分の役割や仕事を最後までがんばる生徒	1 豊かな感性をもち、健康でたくましい生徒 2 社会生活に必要な知識、技能を高め、主体的に社会参加する生徒 3 周りの人に積極的ににかかわり、みんなと協力し合える生徒 4 働くことの意義を理解し、自立に向けて努力する生徒
[各学部のキャリア発達に関する願う姿]		
小学部	中学部	高等部
人間関係形成能力 ○教師や友達とやりとりをしたり、集団へ参加したりする。〈集団参加〉[集団参加]	人間関係形成能力 ○自分らしさやもっている力を発揮して活動する。〈自己肯定感〉[自己理解・他者理解]	人間関係形成能力 ○クラスやグループの仲間と良好な人間関係をつくる。〈自己理解・他者理解〉[自己理解・他者理解]
○日常生活に必要な意思の表現を行う。〈意思表現〉[意思表現]	○教師や友達と共に活動し、集団の中で自分の役割を果たす。〈仲間意識〉[協力・共同]	○集団の一員として自分の役割を果たす。〈集団行動〉[協力・共同]
○あいさつ、清潔、身だしなみを意識して生活する。〈挨拶・清潔・身だしなみ〉[挨拶・清潔・身だしなみ]	○自分の思ったことを相手に伝えようとする。〈意思表現〉[意思表現]	○自分の思いや考えを伝えたり、必要な支援を適切に求めたりする。〈意思表現〉[意思表現]
○状況に応じた言動をする。〈場に応じた言動〉[場に応じた言動]	○場や状況に応じた言動をする。〈協調・適応〉[場に応じた言動]	
情報活用能力 ○日常生活でのおよその予定や活動に対する見通しをもつ。〈見通し〉[様々な情報への関心]	情報活用能力 ○身近な情報を活用する。〈さまざまな情報の活用〉[情報収集と活用]	情報活用能力 ○社会の様々な情報やサービスについて知り、活用する。〈情報収集と活用〉[情報収集と活用]
○学校のきまり、日常生活のきまりを知って守る。〈ルール〉[社会資源の活用とマナー]	○ルールやマナーを意識して行動する。〈ルール・マナー〉[社会資源の活用とマナー]	○社会の法律やきまり、ルールやマナーについて理解し、守ろうとする。〈ルール・マナー〉[社会資源の活用とマナー]
○お金の大切さを知り、お金のやり取りをする。〈金銭の扱い〉[金銭の扱い]	○体験を通して金銭の使い方が分かる。〈金銭の扱い〉[金銭の使い方と管理]	○労働と報酬・消費の関係を理解する。〈労働と報酬〉[消費生活の理解]
○係の仕事や分担の仕事などの自分の役割を知り、実行する。〈役割〉[はたらくよろこび]	○自分の目的や役割を理解し、実行する。〈役割〉[役割の理解と働くことの意義]	○社会生活の中で、自分の役割や分担を理解し実行する。〈役割〉[役割の理解と働くことの意義]
将来設計能力 ○着替え、手洗い、排泄など基本的な生活習慣を身に付ける。〈基本的な生活習慣〉[習慣形成]	将来設計能力 ○基本的な生活習慣の定着を図り、活動をやり遂げる心や体をつくる。〈持久力〉[習慣形成]	将来設計能力 ○職業生活に必要な習慣について知り、実行する。〈働くための習慣形成〉[習慣形成]
○活動を楽しみにし、楽しんで活動する。(低)	○活動に意欲をもって最後までやりとげ、達成感を味わう。〈意欲、達成感・役割の理解〉[生きがい・やりがい]	○将来の生活を思い描く。〈思い描く〉[夢や希望]
○活動を楽しみにし、意欲的に取り組む。(中)		○自分の仕事に最後まで取り組み、やりがいを感じる。〈生きがい・やりがい〉[生きがい・やりがい]
○活動を楽しみにし、活動に最後まで取り組む。(高)		○働くことと余暇とのつながりを理解し、余暇を活用する。〈生きがい・やりがい〉[生きがい・やりがい]
意思決定能力 ○自分でやろうとしたことを時間いっぱい活動する。(＊キーワード検討中)	意思決定能力 ○目標を意識し、時間いっぱい活動する。〈時間いっぱい〉[目標設定]	意思決定能力 ○自分の目標を設定し、達成に向けて活動に取り組む。〈目標設定〉[目標設定]
○自分の好きな遊びや活動を選ぶ。〈選択・好き〉[自己選択]	○自分のやりたいことや良いと思うことを選び実行する。〈自己選択・自己決定〉[自己選択]	○自己選択・自己決定を行い、実行する。〈自己選択〉[自己選択]
○活動の振り返り、一日の振り返りをする。〈振り返り〉[振り返り]	○活動場面で、自分なりに気付き、考え、工夫しながら行動する。〈気付く・考える・見通し・自分なりの工夫〉[肯定的な自己評価、自己調整]	○自分の活動を振り返り、良かった点や改善点を把握し、次の活動に生かす。〈振り返り〉[肯定的な自己評価]
		○自分の課題に気付き、解決しようとする。〈自己調整〉[自己調整]

○は願う姿、〈 〉は本校独自のキーワード、[] は特総研の「キャリアプランニング・マトリックス」の観点

「キャリア発達に関する願う姿」

【学校教育目標】 児童生徒の個別的・教育的ニーズにこたえ、その成長と発達を支援し、充実した学校生活を通して、自ら学ぶ意欲をもち、日々の生きる喜びを感じ、将来の社会生活において主体的に生きていく人間の育成を目指す。			
【目指す子ども像】			
1 豊かな心と丈夫な体を作る人	2 生活に必要な技能を高め、意欲をもって活動する人	3 みんなと仲良く協力し合い、生活の中に楽しみをもてる人	4 自ら進んで仕事をし、働くことに生きがいをもてる人

【各学部目標】

小学部	中学部	高等部
1 元気に生き生きと活動する子ども 2 身近なことに好奇心をもち、意欲的に生活する子ども 3 みんなと仲良く、協力し合って活動する子ども 4 手伝いや係活動などをすすんでする子ども	1 丈夫で動きのよい体をつくり、すこやかな心をもつ生徒 2 生活に必要な基礎的な技術を身に付け、主体的に活動する生徒 3 みんなと協力して楽しく意欲的に活動する生徒 4 自分の役割や仕事を最後までかんばる生徒	1 豊かな感性をもち、健康でたくましい生徒 2 社会生活に必要な知識、技能を高め、主体的に社会参加する生徒 3 周りの人に積極的にかわり、みんなと協力し合える生徒 4働くことの意義を理解し、自立に向けて努力する生徒

※1	※2	キーワード	小学部の願う姿	中学部の願う姿	高等部の願う姿
人間関係形成能力 自己理解・自己管理能力 社会生活能力	人間関係形成能力 自己理解・自己管理能力 社会生活能力	【意 思 表 現】	●日常生活に必要な意思の表現を行う。	●自分の思ったことを相手に伝えようとする。	●自分の思いや考えを伝えたり、必要な支援を適切に求めたりする。
		【集 団 参 加】 ・仲間意識 ・自己理解 ・他者理解	●教師や友達とやりとりをしたり、集団へ参加したりする。	●教師や友達と共に活動し、自分らしさやもっている力を発揮する。	●集団の一員として活動し、クラスやグループの仲間と良好な人間関係をつくる。
キャリア学習能力 職業理解能力 職業探究能力 職業実践能力	キャリア学習能力 職業理解能力 職業探究能力 職業実践能力	【場 に 応 じ た 言 動】 ・挨拶返事・協調・遠慮	●挨拶、返事をする。	●状況に応じた言動をする。	●場や状況に応じた言動をする。
		【働くための習慣形成】 ・基本的生活習慣 ・体力 ・職業生活に必要な生活習慣	●生活リズムを整え、基本的生活習慣を身に付ける。 ●すでに運動に取り組む。	●一人でできる基本的生活習慣を増やす。 ●活動をやり遂げる体力を身に付ける。	●職業生活に必要な習慣について知り、実行する。 ●職業生活に必要な体力を身に付ける。
働くこと・生活すること 働くこと・生活すること 働くこと・生活すること	働くこと・生活すること 働くこと・生活すること 働くこと・生活すること	【様々な情報の活用】 ・見通し ・情報収集と活用	●日常生活でのおおよその予定や活動に対する見通しをもつ。	●身近な情報を活用する。	●社会の様々な情報やサービスについて知り、活用する。
		【ルール・マナー】	●学校のきまり、日常生活のきまりを知って守る。	●ルールやマナーを意識して行動する。	●社会の法律やきまり、ルールやマナーについて理解し守ろうとする。
働くこと・生活すること 働くこと・生活すること 働くこと・生活すること	働くこと・生活すること 働くこと・生活すること 働くこと・生活すること	【役 割】	●係の仕事や分担の仕事などの自分の役割を知り、実行する。	●集団の中の自分の役割を理解し、実行する。	●社会生活の中で、自分の役割や分担を理解し実行する。
		【金 銭】 ・金銭の扱い ・労働と報酬	●お金の大切さを知り、お金のやり取りをする。	●体験を通して金銭の使い方が分かる。	●労働と報酬・消費の関係を理解する。
働くこと・生活すること 働くこと・生活すること 働くこと・生活すること	働くこと・生活すること 働くこと・生活すること 働くこと・生活すること	【生きがい・やりがい】 ・楽しみややりがい ・意欲・達成感 ・思い描く	●活動を楽しみにし、楽しんで活動する。 ●活動を楽しみにし、意欲的に取り組む。 ●活動を楽しみにし、意欲的に取り組む。 ●活動を楽しみにし、意欲的に取り組む。	●活動に意欲をもって最後までやり遂げ、達成感を感じる。 ●活動に意欲をもって最後までやり遂げ、達成感を感じる。 ●活動に意欲をもって最後までやり遂げ、達成感を感じる。	●自分の仕事に最後まで取り組み、やりがいを感じる。 ●働くことと余暇とのつながりを理解し、余暇を活用する。 ●将来の生活を思い描く。
		【自己選択】 ・選択、好き ・自己決定	●自分の好きな遊びや活動を選ぶ。	●自分のやりたいことや、良いと思うことを選び実行する。	●自己選択・自己決定を行い、実行する。
働くこと・生活すること 働くこと・生活すること 働くこと・生活すること	働くこと・生活すること 働くこと・生活すること 働くこと・生活すること	【目標設定】 ・目標意識 ・目標設定	●目標を意識し、活動する。	●目標を意識し、達成に向けて活動する。	●自分の目標を設定し、達成に向けて活動に取り組む。
		【自己評価】 ・気付く、考える ・自己肯定感 ・自分なりの工夫 ・振り返り ・自己調整	●認められたい、褒められたいすることにより自分の良さに気付く。 ●活動の振り返り、一日の振り返りをする。	●頑張ったことを振り返り、次の活動につなげる。 ●活動場面で自分なりに気づき、工夫して行動する。	●自分の活動を振り返り、良かった点や改善点を把握し、次の活動に生かす。 ●自分の課題に気づき、解決しようとする。

卒業後の願う姿

やりがいを感じ、自分の力を発揮して働き、楽しみをもつて生活する。

